
夢の中へ。

犬丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中へ。

【Nコード】

N9551A

【作者名】

犬丸

【あらすじ】

夢の中に入り込んでしまった少女。自分ひとりでは何にも出来ない。せ、そこに助けようとして現れたのは・・・なんと人形？この人形とともに旅して得られるものは？

第1幕

「ジリリリリリリリリリリ」

目覚しの音が部屋に鳴り響いた。

「もうこんな時間？ん？今日って・・・日曜だ。あー間違っ目覚しかけたんだあ。」

どうしよう。ねようかなあ。でも早起きは・・・というんだしね。えっと、早起きは

なんだっけ？50円の得？ま、いっか。ちょっと早くおきてみよつと。」

真央は朝からぼけていた。

いや、これがいつもの真央であつた。

この真央という女性。名前を長野真央という。今年20歳になる女子大生であるが性格はかなりの天然で、周りの人を困らせている。両親も真央にはかなり手を焼いている。本人は全くお構いなしであつたが。

「さて何しようかな？」

真央は普段お昼まで寝ているため、こんなに早く起きて何もする事がなかった。

「下においてテレビでもみようかな？」

真央はベッドから出て部屋を出た。なぜかシンと静まり返っている。聞こえるのは外から聞こえるすずめの泣き声だけだった。

階段を下りると独特の「ギシギシ」と言う音が異様に鳴り響く。リビングのドアを開けると誰も居なかった。

「もしかしてお母さん、お父さん、まだねているのかなあ。」

と真央は思い、寝室へ行ってみた。寝室のドアをそっと開けると・・・

そこには誰も居なかった。

「あれ？今日出かけるとは言っていないはずなのに・・・」

この家には真央以外誰も居なかった。しかし隣の家にも誰も居なかった・・・。

真央の家周辺の誰もなぜか居なかった。なにが起こったのだろうか・・・

寝室にも、居間にも、キッチンにもお風呂にもトイレにも、両親の姿はない。

「んゝ・・・・・・・・ま、いいか
よくない。」

「てれびー、てれびー」

真央はテレビの主電源を点けると、ソファにごろりと横になる。間をおかず流れ始めたニュースに、

リモコンでチャンネルを変えていくのだが、ピンとくるものがない。
「あれ？　なんだろう」

テレビの上、白く細長いものが見える。封筒だ。

立ち上がり、その白い封筒を手にとると、

『長野　真央　様』

真央の名前だけが、印刷されていた。

「あたし宛の、手紙？」

寝ぼけ眼をぱちくりとさせて、真央はとりあえず裏も表もひっくり返しては何度も確かめる。

しかし、真央の名前の他、何の文字も刻まれてはいなかった。

「誰からだろう？」

メール全盛のこの時代、なにか用事があればすぐにメールを送ってくる友人達。一見したところ広告の類でも無さそうだ。

真っ白いだけの封筒からは、なんの感情も読み取れなかった。

勘のいい人間なら、今ある状況の不自然さに、好奇心や、恐怖心を抱くのもしれない。

しかし、彼女は、さして気にすることなく、その封筒を手にとり、中身を広げた。

『踊ろう、踊ろう、みんなで踊れば怖くない、さあ、曲の誘うがままに、踊りに行こう。』

さすがの彼女も、これを見て、驚かずにはいられなかった。

第1幕（後書き）

これは自分のHPでリレー小説として
3人の著者で作成したものを連載という形で掲載させていただきま
す。

ちょっとした冒険ものになっています。
随時続きを載せていききたいと思います。

第2幕

すると電話がなりだした。

「ジリリリリリン」

この家の電話のベルだけは昔懐かしい物であった。
友人なら携帯にかかるはず。

親の親しい人や会社の人も携帯にかけるので
めったに鳴らない物が突然鳴った。

「ジリリリリリン」

真央はしぶしぶ電話をとった。

「はい、長野ですけど・・・」

話した瞬間、受話器の向こうから音楽が流れた。

その曲はくるみ割り人形であった。

そして男の人の声で

「踊ろう、踊ろう、みんなで踊れば怖くない、

さあ、曲の誘うがままに、踊りに行こう」

封筒に入っていた手紙の文章そのままが

まるで歌詞のように耳に入って言った。

まおは催眠術にかかったように

意識が飛んでいった。

ふと気がつくと、真央は遊園地の中にいた。

遊園地のメリーゴーランド。

一際目立つ二頭の白馬に引かれた馬車の中、ピンクサーモンの華やかなドレスを身に纏った真央。

『踊ろう、踊ろう、みんなで踊れば怖くない、さあ、曲の誘うがままに、踊りに行こう』

メリーゴーランドは『くるみ割り人形』の曲と声にあわせて、ゆっくりと回っている。

「ここどこ？ 夢？ あたしまた寝ぼけてる？」

メルヘンチックな風景に、真央はきょとんと小首を傾げて考える。考えて、考えて、考えて、それでも状況の飲み込めない真央は、結局すぐに考えることを放棄してしまう。

「まあいいや。テレビよりずっと楽しそうだから」

馬車の中、真央は曲にあわせて、気持ちよさそうに身体を左右に揺るのだった。

やがて、踊り疲れて、立ち止まった真央は、自分の周りをふと見渡した。

すると、始めは気づかなかったのに、周囲では両親をはじめ、見知った人達が、

それぞれ着飾って、たくさんのお人形さん達に囲まれながら、『くるみ割り人形』

の曲と声に合わせて踊っていたのだった。

「・・・ちよつとまって、なんで、私の周りにはお人形さんがいないの？」

真央は気づいた。自分の周りでは、メリーゴーランドからの曲と声は、

同じように流れるが、みんなの周りにいるような人形達がいなかった。

真央は不思議に思い、人形の方へ近づいた。すると真央と一定の距離を開けるように

人形たちは遠ざかっていった。

人形にあわせてみんなが遠ざかっていった。

逆に真央が下がると前に進んできた。

「・・・なんで？みんな離れるの？どうして。ねえ

だれかおしえて。だれかたすけて・・・」

真央はこらえきれず、その場にしゃがみこんで泣いてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9551a/>

夢の中へ。

2010年10月17日03時22分発行